

## 小柳先生の思い出 — 研究者として、教育者として

稲垣 伸一

小柳先生に初めて職場でお会いしたのは2006年4月、私が実践女子大学文学部英文学科に移籍した時だった。前掲の略歴を参照すると、先生が国内研修から戻られた直後ということになる。当時、1年間の研修を終えられ、先生は精力的に研究に取り組まれている時だったのだろう。そうした研究者としてのイメージが、新しい職場で私が小柳先生に対して抱いた最初の印象だった。私の研究室は日野キャンパス本館5階、小柳先生の研究室の隣だった。そのため、自分の研究室に出入りする際に小柳先生とは顔を合わせる機会が比較的多かった。そして顔を合わせれば先生は気さくに話しかけてくださる。そんな機会を見つけて小柳先生は、まだ新人で右も左もわからない私に、この大学には研究助成の制度があるので、そのような制度を利用すべきだというようなことを教えてくださった。新たに隣の住人になった私に対して、このような研究上のアドバイスをくださる先生に、私は熱心に研究に取り組む姿勢を感じたものだ。

さらに小柳先生について記憶に残っているのは、先生の学科主任時代のことだ。先生が学科主任をお務めになったのは2007年度からの2年間、これは今思い返すと、複数の新たな試みが始まった時期と重なる。例えば、特別事業計画という新しい制度により、文学部全体で入学前教育が実施された。この時は主任である小柳先生の指揮の下、英文学科の提案で携帯電話やパソコンを使った英語学習システムを入学前教育として導入した。

もう一つ、小柳先生の主任時代の取り組みとして私の印象に残っているのは、学科広報の充実だ。具体的には学科ニューズレターとウェブサイトの充実で、前者、現在も発行している *Zephyrus* は、パソコンによる手作りで前年から発行し始めたのだが、先生が主任になられて、1年間に発行する3号すべての印刷を外部に発注するようになり、内容も充実していった。また、すでに公開されていた学科ウェブサイトも、当時徐々に刷新された。学科の活動やカリキュラムの特色を広く社会に伝えることが重要であるという認識から、それまで以上に広報に力を入れ始めたのがこの頃だったのではないだろうか。

今では当然のように行われている入学前教育や広報の例からもわかるように、小柳先生が主任を務められた時期は、常に新しい取り組みを考え実行していくという方向性が、大学でも、学科でも打ち出されていく変革の時期だったように思う。それだけに学科主任として当時の先生のご苦労は多かったことだろうと拝察するが、この時代に始まった取り組みは現在、しっかりと学科に定着している。

小柳先生のキャリアの中で私が直接お付き合いさせていただいた期間は最後の10年間に過ぎないが、先生がお務めになった時代、特に後半は、大学の状況が次第に厳しくなっていく時代と重なるのではないだろうか。先生が調布学園女子短期大学に就職されたのは1981年。この頃は18歳人口も多く、大学にとってこの時期は非常によい時代だったにちがいない。しかし、その後1990年代から18歳人口は減り始め、そして現在も減り続けていることは改めて指摘するまでもない。小柳先生はおそらく大学にとって激動の時代を生きてこられたのだと思う。そんな中、私が存じ上げている先生はいつも真摯な態度で学生に接しておられた。だからイギリス文学、その中でも主にイギリスの女性作家、女性詩人を扱う小柳ゼミには毎年大勢の学生が集った。

私のような若輩が申し上げるのは僭越だが、小柳先生は研究者として、そして教育者として、感情を表に出すことなく常に冷静に、着実にお仕事をこなしておられたというのが私の印象だ。だからこそ、退職される先生に心から「お疲れ様でした」と申し上げたい。大学はきっと今後も変革を迫られ、厳しい時代は続くだろう。そんな時代だからこそ、小柳先生にはこれからも実践女子大学文学部英文学科に目を向けていただき、経験豊かな大先輩からの貴重なご助言をいただきたいと切に願っている。

